特別寄稿

《徳山藩再興三百年記念　徳山毛利家と七士墓参》

徳山藩改易（かいえき）の遠因

徳山毛利家　毛利就囮（なりくに）
会員　栗　﨑　健

毛利輝元の子、毛利就隆（なりたか）が元和三年（一六一七）に三万石を分与され長州藩の支藩として立藩。慶安三年（一六五〇）藩庁を野上に移し地名を徳山と改め、これにより正式に徳山藩となった。その後、明治維新を迎えるまでの約二百二十年の間、徳山藩においては二つの大きな痕跡が残された。ひとつが「徳山藩改易」（お取り潰しのこと）であり、もうひとつが「徳山殉難七士」の事件である。

本年、令和元年は徳山藩再興三百年の節目の年であり、またその記念すべき年に、徳山殉難七士の墓参が行われることは感慨深く、感謝の念に堪えない。また、心より哀悼の意を表します。

その大きな事件の一つ、徳山藩が消えてしまった「徳山藩改易」の遠因について簡略に記してみる。

「万役山（まんにゃくやま）事件」は徳山藩三代藩主・毛利元次と萩宗藩五代藩主・毛利吉元の間で起こった大事件である。

正徳五年（一七一五）六月、宗家萩藩領西久米村と徳山藩領の境界で萩藩領農民喜兵衛が松の木一本を伐採し、持ち帰ろうとしたことにより、徳山藩山廻り足軽伊沢里右衛門が喜兵衛の首をはねた事件である。

両藩双方の言い分が異なり、ついには幕府の裁定を求める事態となり、思いもかけない徳山藩改易となるのである。直接は松の木一本に起因した事件であるが、根本的な要因は徳山藩誕生当時にまで遡ることになる。徳山藩改易の遠因をあげてみる。

【遠因その一】

毛利輝元が関ヶ原の合戦に敗れ、百十二万石より三十六万石に減封された。そんな状況下で、元和三年（一六一七）、次男の就隆に徳山藩三万石を分知させたこと。

【遠因その二】

輝元は就隆の将来を長府藩主・毛利秀元に託したい気持ちから秀元の長女松菊子を夫人として迎えさせたが、後、就隆は夫人と離縁した。

【遠因その三】

就隆は、徳山藩の表向きの石高四万十石を正直に届けようとした兄秀就に、四万五千石を届けるよう再三主張。秀就を困惑させた。

【遠因その四】

慶安二年（一六四九）、秀就は江戸城修理普請を命ぜられる。その経費が多額であるため、弟就隆に一部負担を交渉。就隆は参勤交代に出費が多く、余裕がないと断る。これにより宗藩に義絶を申し渡され、兄弟仲悪化。

【遠因その五】

秀就と就隆の生い立ちの相違。秀就は藩主として公的な環境に左右された生活。就隆は父・輝元の膝下にあり、愛情に包まれ気随気儘に成長した。

【遠因その六】

二人の性格の相違。秀就は謹厳実直。就隆は自由奔放。

【遠因その七】

徳山藩を新設した際、萩藩宗家にもない馬場（桜馬場）を造ったこと。又、初代就隆および夫人の墓碑の上に宗家にもない立派な瓦葺きの屋根を設けたこと。後に、徳山藩に過ぎたるもの三つ、と謡われた二つである。因みに三つめは、徳山藩再興に尽力した奈古屋里人である。

以上のような背景と複雑な人間関係から、宗家萩藩と徳山藩の間には不信感が生まれ、初代徳山藩主・就隆から約百年後の三代藩主・元次のときに不幸にも「万役山事件」が起こった。

元次は向学の士であったが、自身大変癇の強い性格であり、萩藩宗家五代を長府藩主吉元が相続した際、対抗心を禁じ得なかった。

宗家を恐れない元次と、宗家の権威に固執する吉元の間にはまことに微妙なものがあり、徳山、萩、長府との三家間に確執と不快の風情が、容易に拭い去れなかったことが後年、改易の問題を生ずる遠因となったのである。

毛利就圀

徳山藩改易から再興への道

かくして、正徳六年（一七一六）四月、萩宗藩主毛利吉元の名を以て幕府へ報告。元次の隠退を幕府に請願したのである。

しかし、幕府の裁定は願い出た吉元さえも驚く、実に以外千万なものであった。

元次は、徳山藩家来の随従は誰一人許されず、遠く出羽国新庄藩に引き渡され、嫡子百次郎らは萩宗藩へお預け、徳山領は残らず萩宗藩へ返還となった。

実に徳山藩はお取り潰しとなったのである。

この江戸の変報は徳山へも伝えられ、未曽有の大混乱を引き起こした。

これより少し前、赤穂浪士の快挙が世間を騒がせていた。徳山藩においても、主君元次の意に沿い、あくまで宗藩と戦う強硬派と、嫡子百次郎を推し、再興の時を伺う穏健派に別れた。しかし冷静に現実をみれば、犠牲者を出した赤穂の事件とは少々事情が違い、自重論が台頭してくるのである。

奈古屋里人の画策

事の起こりは、宗藩に対し一歩も引き下がらなかった藩主元次の態度にあり、それに盲従する老臣たちであったが、その元次に直言してきたのが奈古屋里人であった。しかし元次は聞こうとせず、批判的な里人を追放してしまった。里人は三田尻向島に居を変えた。

江戸の変報が徳山に伝えられた翌朝には、執政奈古屋玄蕃（げんば）からの飛脚で里人に伝えられ、ことを知った里人はすぐさま徳山城下に馳せた。その後、玄蕃宅に身を潜め、同志の糾合に奔走する。

こうして、里人による徳山藩再興への画策が始まった。旧徳山藩の村々から百姓・町人らを集め、萩宗藩に直訴を計画するも失敗、また玄蕃は遠島に処せられ、有力な盟友までも失ってしまった。ここで非協力的な宗藩の説得を諦め、直接幕府に訴えることを決めた。こうして、江戸、京都、大阪の同志たちと徳山藩再興

への道を、再び歩み始めた。

幾度の再興運動の失敗を重ね、たどり着いたのが、無力な百姓の名を以て、元次の善政を謳い、幕府の公正な判断とその善処を嘆願するという嘆願書の提出であった。

享保四年（一七一九）正月、「周防徳山領百姓中」と署名して老中水野和泉守ら宛ての三通の嘆願書が出来上がった。屋敷に投げ込まれた嘆願書は和泉守らの手元に回り、やがて江戸城内に持ち込まれた。これまで少なくとも三年間、忘却の彼方に押しやられていた徳山藩の問題がこの時、殿中の話題になってきたのである。誰もが百姓の手によるものではないと思うものの、心ある徳山藩士たちの作と知れば知るほど、その胸中に江戸の武士たちは同情したのである。嘆願書の内容の真偽はどうでもよかった。里人を盟主とする一団の忠誠心が閣老を動かし、再興の朝議が決定された。

老中和泉守は萩宗藩主吉元に内意を伝え、吉元の内願の形式をとり、元次のお預けを免じた。そして、当初の吉元の願い通り、元次の隠居と嫡子百次郎への家督相続が許可されたのである。遠く新庄の地でこの報を受けた元次は千秋の思いで百次郎の迎えを待った。百五十人の迎えが江戸から新庄に向かって出発の時、元次の娘である内田信濃守正偏夫人は随従する家来二人を呼び、改易以来、寝食を忘れて再興に尽力した奈古屋里人と他四人（後述の五烈士）の功績をいち早く元次の耳に入れるよう依頼した。

娘内田信濃守夫人の伝言を聞いた元次は感慨ひとかたならず、特に勘当された里人が、最も深く元次の身を案じ奔走したことを知り、即刻、懐中紙に感状をしたため、金一封を贈った。

その後まもなく、まだ前髪の一八歳の若者であった百次郎に徳山の地がそっくり返還され、以前の家来もすべて徳山藩に帰るよう命じられた。享保五年（一七二〇）、元堯と改めた百次郎は同年一二月一九日、従五位下に叙し、日向守に任じ、名実ともに徳山藩が再興なったのである。

現在、東京港区三田に日向坂がある。かつてその地に徳山藩江戸屋敷があり、初代藩主毛利就隆はその三田邸で逝去。二代藩主元賢は三田邸で生まれ、ともに日向守に任じられた。また、四代藩主元堯も同じく日向守を賜った。日向坂の地名の由来である。

徳山藩再興に尽くした五烈士

奈古屋勘左衛門里人 格式馬廻 百二十石　後、浪士

戸田佐右衛門茂貞 格式中小姓 二十五石

戸田仁左衛門安貞 戸田茂貞子 格式中小姓 二十五石

吉弘嘉右衛門直信 戸田茂貞兄 格式中小姓 三十石

稲垣六七忠政 後、岡部姓 格式中小姓 三十石

戸田茂貞、安貞親子と稲垣は元次に奉公したく、宗家に随身することを拒み、追放となる。それより国元を脱走し、上方に上り里人に協力した。

吉弘直信は、下野国鹿沼藩三代藩主内田信濃守正偏正室（毛利元次二女百子）の家来であった。他、多数の有志の協力があったことを忘れてはならない。

祐綏神社 〈祭神 初代藩主毛利就隆公・9代藩主毛利元蕃公 周南市〉

徳山殉難七士とは

明治維新夜明け前、幕末の激動期―。

徳山藩においても、天皇中心の政治体制にするべきだという尊王攘夷を唱える正義派（改革派・倒幕派）と幕府に従うべきだという俗論派（保守派・佐幕派）が激しく対立していた。

そうした中、元治元年（一八六四）の禁門の変後、徳山藩では俗論派が実権を握り、正義派の中心人物だった徳山藩士たち、本城清、江村彦之進、児玉次郎彦、浅見安之丞、河田佳蔵、信田作太夫、井上唯一の七名が暗殺や刑死など、いずれも理不尽な形で尊い命を落とした。

徳山藩における「徳山藩改易」ともう一つの大事件。いわゆる「徳山殉難七士」の事件である。

本城清（一八二五～一八六五）

徳山藩士江村忠韶の次男として生まれた。

通称「清」、名は「斐」、字は「仲章」、号を「素堂」と称した。徳山藩士本城訥の養子となる。

本城家は偉大な儒学者を三代にわたって出した名家であり、「本城三儒」として讃えられた。岐山通りの本城家屋敷跡地に「本城三儒屋敷跡」と刻まれた石碑が今も佇んでいる。

本城本家より分家した本城桓は「紫巖」と名乗る。徳山藩校鳴鳳館の初代教授となり、子弟の育成や徳山の教育レベル向上に大いに貢献した。紫巖こそ、「本城三儒」の初代であり、清の祖父である。

紫巖の長男訥こと「太華」は父の志を継ぎ、徳山藩校鳴鳳館の四代教授となった。世子広篤（後の九代藩主毛利元蕃）の侍講も務めた。そして、その太華の跡を継いだのが本城三儒の三代目「素堂」、つまり清である。太華には嗣子がなく、甥である清を養子として迎えた。

清は弘化年間、近侍となり、度々藩主に従い江戸へ

来往する。安積艮斎に学ぶ。後、学館訓導役となり、安政年間弟江村彦之進と九州を歴遊し、各藩の形勢を視察する。

万延元年（一八六〇）藩主元蕃は、長府の公子（後の毛利家十代元功）を養いて世子とする。清はその近侍を兼ね、なお、文学の師範として模範となる。学館を拡張した際、政府両人役兼学館教授となり、その後、代官役に転じ、政府の枢機に参画する。

元治元年（一八六四）七月、禁門の変後、徳山藩では俗論派が実権を握り、正義派の中心人物が次々と暗殺や刑死で命を落としていく中、直接事件に関与していなかったといわれる清も事件のリーダーとみなされ、すべての官職を剥奪され、浜崎の獄へ入牢された。翌二年、世では刻々と正義派の反攻が伝わり、清等の奪還、逆襲に焦る俗論派はいち早い処刑をと一月一一日毒入り酒を飲まそうとするが、清は怪しみ飲まなかったという。しかし、同一四日、「死を減じて流罪にする。」と騙し、現在の遠石緑地公園近くの新宮の浜に連れ出し、ついに、海にて無残に殺害された。時に四一歳であった。

墓所は周南市舞車町大成寺墓地。本城三儒家の荘厳な三基の墓碑と後を継いだ幾馬等の墓碑が並んでいる。

元治元年一一月一四日、清が獄中に於いて妻子に宛てた遺書が遺されている。

於寿美殿へ　一筆申し残し候、拙者厳刑を蒙るといへども、其の罪にあらざれば悲しみ給うことなく、忠臣の妻となり候て幸せなりと諦められ、目出度き余年を送り給へかしと存じまいらせ候、かしく

次に宣馬に申し残し候事　我等幼きより篤く聖賢の道を信じ、守る所を失はず候て、かかる厳戮を蒙り候は天也、悲しむに足ることなし、汝幼年と申すにもこれなく候へば、我等の心底をつらつら体認せしめ、忠

孝の道を守り、いかなる患難に逢い候とも、人に指をさされず、父の名を落とし申さざる様、心掛けらる可く候事、

一、文武の心掛け、ゆるがせこれある間敷く候事

一、酒色に耽り申す間敷く候事

一、叔父様を我等と相い心得、父の如く念を入れ、御教戒を乞い申さる可く候事

一、母へ懇ろに到さる可く候事

（周南市立中央図書館蔵）

本城素堂　墓碑碑文

徳山藩士本城君墓碣銘

本城君名斐字仲章號素堂江村忠韶氏第二子母本城氏外叔無子養君嗣本城氏本城氏累世居徳山仕毛利氏列騎隊弘化季中為近侍邑藩主毎往来江戸安政甲寅辞職補興譲館訓導萬延庚申藩主近同族毛利元運第二子以為世子擢君為近侍兼文學師範文久癸亥藩主大擴張文藝學君為政府兩人役兼學校教授攝学長之職参政府之機密十一月辞學職矣元治之初藩主罹疾久不視事奸邪之徒乗隙結私黨以恣威福八月矯命褫奪君之官職命親族禁侘人之會見尋而拘幽校内之空舎除族以投獄令屠卒看守之妻子亦拘繋親族之家停稱其姓慶應乙丑一月奸黨命屠平将毒殺君怪之曰藩制無罪因賜酒之例今日之酒不知自何屠卒強辦曰今日行政始之式官以特恩所賜君雖知其詭計不必爭之佯飲曰以覆地上是以得免毒殺間數日屠卒又来報曰官減死一等處流刑君曰傳官命必依吏人爾輩無傳命之理矣屠卒曰傳命當在到配所之時今以便宜達其旨焉耳君固知其詐欺然已有所決不必爭也遂至新宮海邊絞殺之奸黨秘死埋死體遠石海沙中死時四十一慶應乙丑二月近親得其死之實請遺體葬無量寺境内門人建石其上後明治維新録君死國事特賜位記且列国祀嗚呼余往年與君在安積氏塾因余深識君君資性温厚在官清廉尤存心民事到處少民悦服有循吏之聲平素好讀書經史文章雖以専門名家者恐有不及焉安政年間與令弟彦之進遊学九州所交多有為之士而其言論觸奸黨之疾忌亦不少蓋君之禍原因於此亦不可知如令弟江村氏余之在京都數往来談時事而亦死毒刃矣今距君兄弟死始五十季當艸此文懐舊之情有不可禁者因作銘曰

元治之變國無綱維正邪顛倒奸臣私有為之士殺戮無遺天運循環反正有時豺狼屏跡妖雲復披濱崎之瀬海清樹蕤志士之績永存此碑

貴族院議員従二位勲二等男爵楫取素彦撰

水清院温與王白居士

本城家墓所〈右より本城太華、紫巖、素堂（清）〉

江村彦之進（一八三二～一八六四）

江村彦之進は江村家の四男で、本城清の弟にあたる。名は「厚」、字は「季徳」、号は「風月」と称した。

藩主からの信頼は厚く、文才にも優れ、徳山の歴史などを記した「徳山略記」を編纂、他藩から訪れたものは彦之進を訪ねない者はいなかったという。また、ペリーの艦隊が浦賀沖に来航した時は、その対策を藩に提案し、藩主から高い評価を受け、興譲館の句読師に抜擢された。

安政四年（一八五七）には江戸に出て幕末期の著名な儒学者安積艮斎に学び、瞬く間に塾長を務めている。

その後、兄の清と共に九州を遊歴。また大野直亮、小川潜蔵を従え、山陽、山陰の諸藩を訪れ見識を深め、萩においては明倫館で学び、小田村文助（後の楫取素彦）、周布政之助ら萩宗藩の藩士たちと交流を深めた。

安政六年（一八五九）長州藩は幕府の敵となる中、

折り合いの悪い吉川岩国及び長府藩に「長州は一致団結すべし」と萩宗藩主敬親は小田村文助に説得を命じる。情報を持たない小田村はかねてよりの友、彦之進に情報を求め、小田村の画策は見事功を奏したのだった。その時の、彦之進が小田村宛に仔細を綴り協力した手紙が今も遺されている。

その後、正義派の志士として下関の豪商白石正一郎を訪ねたり、京都、大阪、江戸と活発に活動する。その頃、藩主元蕃の護衛で一緒に京都滞在中の西洋砲術指南役兼崎昌司（号・橙堂）が病没。藩士達の寄金により墓碑を建立した。その時、揮毫したのが彦之進で「徳山藩士兼崎昌司墓」が京都大徳寺黄梅院（毛利家菩提寺）に今も佇んでいる。

徳山藩に戻ってからは元治元年（一八六四）興譲館訓導役を務め、藩政にも携わり海防局長や会計局長を任せられる。諸般の制度を改革、軍備拡張、財政立て直し等、徳山藩の発展に大きく貢献した。

しかし、この年、徳山藩士河田佳蔵が家老富山源次郎を襲った二日後の八月一一日、突然職を解任される。翌早朝、藩主の命令と俗論派が徒を組み江村家に入り、兄純一郎の制止も聞かず彦之進を連れ去る。悠然と応じた彦之進であったが、現在の桜馬場東端裏にあたる東関門あたりで、突然、だまし討ちに会い滅多切りされた。大成寺に向かって倒れたという。享年三三歳。

墓所は周南市大迫田、本正寺墓地。島原の乱で活躍した江村五郎左衛門、第六代徳山町長江村忠精等、時代に華を添えた江村家の人々と共に眠る。

浅見安之丞（一八三三～一八六五）

浅見栄三郎の長男。同じく七士として命を落とした児玉次郎彦の実兄である。名は「正虔」、字「伯恭」、号を「烟渓」と称した。

安政元年（一八五四）に興譲館の句読役に用いられ、後進の教育にあたったほか、剣術も一流で、大島流槍術の指南役も務めていた。

その後は徳山藩の重責を担い、万延元年（一八六〇）に小姓役となり、文久元年（一八六一）には藩主の元蕃に従って江戸に行き翌年京都に入る。この年の三月には御親兵に選ばれ、翌四月石清水行幸の日には公卿の三条西季知の警護役を務める。元治元年（一八六四）七月に禁門の変が起きると、急いで徳山藩に帰り、藩にこの様子を伝えた。

この後、元蕃の嫡子である元功の学術指南役を命じられたが、俗論派の家老富山源次郎が河田佳蔵に襲撃された直後の元治元年八月一二日、正義派の中心人物として俗論派に捕らえられ、本城清とともに浜崎の牢獄に投獄された。獄中で毒薬を飲まされそうになったが見破り、この時は難を逃れた。安之丞は獄中にあって詳細な獄中日記を記している。

元治二年（一八六五）一月一四日夜、清と同じく新宮の海辺で顔首を海に浸されて縊殺された。一年後、死の事実を知った家族が遺体の返還を要求したが拒絶されるも、獄吏より内々に遠石の浜辺にて引き渡され、その夜、葬儀が行われた。享年三三歳であった。

墓所は周南市一ノ井手、興元寺墓地。浅見家一族とともに眠っている。

児玉次郎彦（一八四二～一八六四）

児玉次郎彦は明治期に陸軍大臣、内務大臣、文部大臣などを歴任し、日露戦争などで活躍、台湾総督も務めた児玉源太郎の義理の兄にあたる。

徳山藩士浅見栄三郎の次男で名は「忠炳」、号は「青田」「品山」。安政三年（一八五六）、児玉家の当主である半九郎が亡くなった時、唯一の男子だった源太郎はまだ四歳と幼かったため、同五年（一八五八）家督を継ぐため児玉家に入り、源太郎の姉久子と結婚した。

次郎彦の剣術、柔術は人並み外れ強く、体格は鴨居に届くほどだったという。剛毅で物事にも動じない性格の人格者で和漢の学問にも優れていた。かつて『大日本野史』を編纂した飯田忠彦がその著書を伏見奉行

林肥後守に取り上げられた時、有栖川宮熾仁親王の命を奉じて林邸に往来、弁論数回で取り返した。これにより千古不朽の大作として遺ったのである。

京都で周旋方を務めたあと、徳山藩に帰ると目付を命じられ、京都留守居役も兼任するなど、藩内で重責を担った。その後、興譲館で助訓役や寮長などを務め、多くの後進を育て、また、尊王攘夷を唱え、吉田松陰門下の久坂玄瑞や入江九一、寺島忠三郎らと交友を深めた。

河田佳蔵が俗論派の家老富山源次郎を襲撃し、次郎彦もこれに加わったため、俗論派はその命を狙った。この事件の三日後、元治元年八月一二日、俗論派が児玉家を襲った。その時次郎彦は外出していたが、帰宅途中一団と出会い「もし事があれば家で話をしよう」と一緒に家まで同行。次郎彦が自宅玄関に上がり、刀を腰から離そうとしたその時、ひとりが背後から斬りかかると、これを合図に一斉に次郎彦に襲いかかり次郎彦はその命を落とした。享年二三歳。

児玉家は邸宅を没収され家名断絶となったが、後に復権し、義兄を敬愛していた源太郎は人手に渡った生家を買い戻すと、義兄の死を悼んで「贈従四位児玉次郎彦君遭難之跡」と記した石碑を建立。そしてこの場所に源太郎は私設図書館「児玉文庫」を建てた。現在その地は新しく公園として整備され、石碑と源太郎の産湯の井戸、児玉文庫の記念碑などが佇んでいる。

興元寺の隠居山墓地の一角に緑に囲まれた児玉家墓所がある。次郎彦は源太郎の遺髪塔と並び、妻久子と眠っている。

甲子の秋
心あらば庭の草木にとひてまし
すますなりての後の秋風

信田作太夫（しださくだゆう）（一八二五～一八六五）

信田作太夫は文政八年（一八二五）徳山藩士信田十左衛門の家に生まれた。名は「徽胤」、字「伯壱」、号

を「秋琴」と称した。剣術に優れ、安政元年（一八五四）に筑後の柳川藩に遊学、槍術の名手加藤善右衛門に槍を学び、日ならずして塾頭となる。その後、福山藩に招かれて槍術の指南役を務めた。また、安政七年（一八六〇）には徳山藩主より大島槍術指南役を仰せつかる。

文久二年（一八六二）勅使姉小路公知（あねがこうじきんとも）の護衛役として江戸に行ったのち、京都で周旋方を務める。御親兵にも選ばれ、奇兵隊とも繋がりがあった。

四月一八日の政変、甲子の乱、禁門の変により俗論派が勢力を増し、正義派の中心人物として俗論派に捕らえられ、浜崎の獄に繋がれた。元治二年（一八六五）一月一四日、本城、浅見と同様に新宮の浜で顔首を海水に浸して殺された。享年四一歳。

ちなみに本城、浅見、信田の死は当初、牢屋内での病死として藩主に報告されたという。

墓所は周南市舞車の大成寺共同墓地にあり、信田家の人々とともに手厚く葬られている。

河田佳蔵（かわたかぞう）（一八四二～一八六四）

徳山藩士林正愛の第二子で、名は「政佳」、号を「月波」と称した。河田鉄蔵の養子となって河田家を継いだ。

性格は温厚で寡黙だったと伝えられる。幼い頃から江村忠純、本城清に学び、剣術は浅見栄三郎に指南され秀でていた。栄三郎は実子の安之丞、次郎彦と変わらず愛していたという。

文久二年（一八六二）には元蕃に従って京都に入り、周旋方を務めた。徳山藩に帰ってからも萩詰めの留守居役や両人役補助などの要職を任された。また、諸隊のひとつである先鋒隊の元締も兼ねるなど、藩内の信頼も厚かった。

俗論派が台頭すると正義派の中心人物として正義派の復権を目指して活動。元治元年（一八六四）八月九日、俗論派のリーダー的存在だった家老の富山源次郎宅にひとり訪れ屋敷にあがる。いざという時の為に富

山邸の隣家である児玉次郎彦が富山邸の庭に忍び込んでいたが家僕にみつかり騒ぎとなってしまい、しからばと河田は暗殺にかかったが失敗に終わる。直後の取り調べではふたりの刀に傷痕が残っていたと『忠正公傳』に記されている。富山源次郎は河田佳蔵の伯父にあたることから河田がひとり乗り込んだと思われる。

富山の暗殺に失敗した後、河田は藩内に潜む。その後、百姓に扮して室積港にたどり着き、そこから船で上関の室津へ向かう。室津で庄屋を営む正義派の小方謙吉(第二奇兵隊の参謀としても活躍した後の謙九郎。徳山の櫛ヶ浜の温品家出身で、明治期に活躍したスキーと航空の父長岡外史の実父でもある)を頼り、長州征伐の情報収集を行った。

この後、一度徳山藩に戻って情報を伝えるものの、厳しい検問が行われており、上関に船で戻ることもできなかった。そのため、当時岩国に滞在していた萩宗藩の正義派の重鎮清水清太郎らを頼ろうと陸路で岩国に向かうものの、岩国藩の役人に拒まれる。やむを得ず再び徳山藩に向かおうとしたところ、欽明路の峠の手前で岩国藩の武士の検問に引っかかって捕らえられてしまう。

俗論派の手に落ちた河田は浜崎の牢獄に入れられた。しかし、河田は獄中にあってもひるむことなく、毎日詳細な獄中日記を書き続け、また、両親らに遺書を残し、元治元年(一八六四)一〇月二四日、国を憂う辞世の詩を高らかに吟じて処刑された。享年二三歳。

疎狂憂国欲排氛　一片赤心聊報君
剣響忽醒廿余夢　他年誰弁正邪分

子を思ふ心は胸に満つれども
捨てゝ営め君が千年を

墓碑は周南市泉原共同墓地にある一族の林家墓所近くに、今なお憂うが如く、ひっそりと佇んでいる。

井上唯一（一八四二～一八六四）

井上唯一の名は「和彦」後「和暢」、号は「雪崖」と称した。徳山藩士井上九郎左衛門栄尚の六男。幼い頃から武芸に優れ、また、連歌や和歌を嗜んだ。成長してからは槍術に励み、浅見安之丞や信田作太夫から槍の薫陶を受けた。

文久三年（一八六三）に攘夷決行で萩宗藩が下関で外国船に砲撃した時は元蕃の命で出陣し、世子元徳の護衛にあたった。また、同年、政変において七人の公卿が長州藩に亡命した時は、その護衛役も務めている。

後、高杉晋作が創設した奇兵隊に入隊して下関に駐屯し、久坂玄瑞に通じて関西方面の情勢を探った。禁門の変のあとに徳山藩に帰り、正義派の志士として行動するが、情勢が大きく変わって俗論派が台頭し、捕らえられ浜崎の獄舎に繋がれた。

河田とともに元治元年（一八六四）一〇月二四日、勤王の志を高々と吟じて処刑された。享年二三歳。

蜻蛉の有るか無きかの身をつみて
人の哀れも知られける哉

潜身報国洛城間　幸脱重囲帰故山
此日縦然逢斬戮　勤王未変赤心殷

墓所は徳山市（現周南市）八正寺にあったとされるが今はない。井上唯一屋敷跡の石碑が周南市弥生町にあるが、以前、その屋敷に住まわれていた子孫の方によると一家が県外に転居する際、墓じまいをされたと聞いている。

「徳山殉難七士」はその後、朝命により全員、靖国神社に合祀され、従四位を贈られた。

徳山殉難七士の碑

徳山殉難七士
　　贈従四位の碑
〈周南市児玉神社〉

徳山藩第３代藩主
毛利元次公墓所と墓碑
〈周南市指定文化財　徳山毛利家墓所〉